

2年次総合的学習の時間「プロジェクトワーク」活動報告

「総合的学習の時間」委員会 深澤孝之 川上有正 松井一夫 丹羽美由紀
本弓康之 建元喜寿 工藤雄司 中村真由美
黒岩健一

平成23年度から新課程の移行をスムーズに行うため、教育課程の変更を行った。1～3年次まで各1単位で行ってきた総合的学習の時間を2年次で2単位とした。今年度は総合的学習の時間の中心的活動として「プロジェクトワーク」を行った。この活動を通して多くの生徒は探求的活動の考え方や方法などについて意識を高めることができた。

キーワード：総合的学習の時間 課題解決活動 プロジェクトワーク

1. はじめに

本校では1年次に1単位、2年次に2単位の総合的学習の時間をおいている（平成22年度入学生）。授業担当者は2年次4クラスの担任・副担任である。平成23年度は総合的学習の時間にプロジェクトワークを実施した。プロジェクトワークの活動を振り返り、今後の総合的学習の時間の内容を検討する際の材料とするためにその評価を行った。なお、本項の一部は本校編著「新時代の総合学科」（p39~p41）に掲載されている内容を再構成したものである。

2. プロジェクトワークの概要

1, 2学期で行う、プロジェクトワークは3年次に実施する卒業研究につながる取り組みとして位置づけた。卒業研究で最も大変なのが自分のテーマを決めることで、近年テーマ設定でつまづく生徒が多くみられる。そこでこのプロジェクトワークでは教員の提示したテーマについて課題解決を進めながら、考えることについて学ぶこと、身の回りにある課題に目を向けそれらのことについて自分の考えを持つことなど課題設定の基本的な態度の習得を目指した。内容については担当教員の得意なこと、興味のあること、好きなことを自由に設定し、担当者も楽しく授業を行うことができるような体制をとった。表1に担当者ごとのテーマ一覧を示す。

総合的学習の時間は土曜日に150分の3時間で行われる。年間で20日程度が授業日となり、2単位相当である。そのうちプロジェクトワークは1, 2学期の15日間の約45時間を配当した（長期休業中の活動も数日行った）。

3. 本校における総合的学習の時間の位置づけ

総合的学習の時間は本校キャリア教育の、2年次における中心的な役割を担うものと位置づけられている。1年次の産業社会と人間・キャリアデザイン、2年次の総合的学習の時間、3年次の卒業研究を本校ではキャリア教育のコアとして次に示すような流れで展開し、年次ごとにキャリアを支える基本的態度の育成を目指している。

◎「キャリアデザイン・産業社会と人間」

（を核として1年次）では基本的学習・生活習慣（セルフマネジメント力）、報告書の書き方や発表の方法、情報収集、資料整理など探求活動に必要な基本的スキルおよび論理的かつ構造的に考えを組み立てことのできる思考力（クリティカルシンキング）の基盤獲得を目指す。また、自らの生き方・あり方について考え、自分と向き合うことのできる姿勢を養う。

◎「総合的学習の時間」（を核として2年次）では

1年次で身につけた「ベース」をもとに、そのレベルアップを図る。他人（教員や生徒）との相対的な価値観のやりとりを通して、自らの価値を創造する機会を提供する。

◎「卒業研究」（を核として3年次）では

課題発見、課題解決の実践力を獲得するとともに、自らの価値（物事を判断するための考え方・意志）を自らが認識し行動できる力の獲得を目指す。

表1 プロジェクトワークのテーマ一覧

担当者	テーマ/内容
松井	埼玉県にゆかりのある人物の伝記をつくる
深澤	社会貢献活動を体験する！～ボランティア・福祉・災害支援～
丹羽	おみやげの配り方は何通り？—確率・組み合わせ論—
本弓	映画をみて考える
工藤	風力発電やエコカーの将来を予想しよう など
建元	アジア隣人プログラム
川上	小さな平和構築を考える
黒岩・中村	aプロジェクト

このように総合的学習の時間を学校の中心的な学びの一つと位置づけることによって、総合的学習の時間は本校にとってどうしても必要なものとして機能している。

(本校編著「新時代の総合学科」より)

4. プロジェクトワークの評価

今回のプロジェクトワークにおいては前項で示した役割を達成するため、次のような目標を設定し活動を行った。

- ・多様な視点の獲得および課題発見力の向上
- ・課題解決方法(目標設定・解決へのための考え方)の育成
- ・主体的に学ぶ態度の育成
- ・課題解決に協同して臨む態度の育成

これらの目標がどの程度達成できたかを評価する方法として一般的によく用いられるのは、生徒に対するアンケートおよび授業者の主観的な考察である。このような方法によって正しい評価が可能なのかという疑問は残る。ただ次年度以降、総合的学習の時間を運営する教員が授業計画を作成する場合の貴重な資料となる。実際の授業は数多くの試行錯誤から生まれてくるものであるから、一つの実践の結果をできるだけ細かく報告し引き継ぐことは教育の現場にとっては意味のあることだと考える。

プロジェクトワークについても生徒全員に対して質問紙によるアンケート調査を実施した。また授業者はそのアンケート結果をもとにして授業の考察を行った。(資料1～資料8)

アンケートは上位項目を「学習内容の振り返り」および「学習成果の振り返り」として、それぞれに次のような下位項目を設けた。

「学習内容の振り返り」

Q1：(横断的・総合的な学び)：ひとつの境界に限定されない、幅広い分野の知識や技術を、横断的・総合的に学ぶことができた。

Q2(探求的な学び)：何かについてより深く考え、答えを探し求めることができた。

Q3(目標の把握)：そのプロジェクトが目指す「目標」について、具体的に意識しながら活動ができた。

Q4(主体的な課題発見・設定)：目標を達成するために、解決すべき「課題」は何なのか、自分で考え、探すことができた。

Q5(主体的な思考と判断)：「課題解決」のために何が必要か、自分で考え、判断することができた。

Q6(主体的な学び)：「課題解決」のために必要な知識や技術を、自分から学ぶことができた。

「学習成果の振り返り」

Q1(学び方・考え方)：何かを学んだり、考えたりする方法を、新たに身に付けることができた。

Q2(在り方・生き方)：自分がどうあるべきか、これからどう生きていくべきか、以前よりも、考えるようになった。

Q3(課題発見)：身の回りにある「未解決の課題」について、以前よりも気がつくようになった。

Q4(主体性)：何かの問題を自分の手で解決したり、明らかにしたいと、以前よりも思うようになった。

表2 生徒アンケート結果

設問項目 「学習内容の振り返り」	肯定的回答	否定的回答
Q1 (横断的・総合的な学び) ひとつの境界に限定されない、幅広い分野の知識や技術を、横断的・総合的に学ぶことができた。 (n=150)	79.3%	20.7%
Q2 (探求的な学び) 何かについてより深く考え、答えを探し求めることができた。 (n=150)	92.0%	8.0%
Q3 (目標の把握) そのプロジェクトが目指す「目標」について、具体的に意識しながら活動ができた。 (n=151)	79.5%	20.5%
Q4 (主体的な課題発見・設定) 目標を達成するために、解決すべき「課題」は何なのか、自分で考え、探すことができた。 (n=151)	72.2%	27.8%
Q5 (主体的な思考と判断) 「課題解決」のために何が必要か、自分で考え、判断することができた。 (n=150)	78.7%	21.3%
Q6 (主体的な学び) 「課題解決」のために必要な知識や技術を、自分から学ぶことができた。 (n=150)	72.0%	28.0%

設問項目 「学習内容の振り返り」	肯定的回答	否定的回答
Q1 (学び方・考え方) 何かを学んだり、考えたりする方法を、新たに身に付けることができた。 (n=151)	93.4%	6.6%
Q2 (在り方・生き方) 自分がどうあるべきか、これからどう生きていくべきか、以前よりも考えるようになった。 (n=151)	68.2%	31.8%
Q3 (課題発見) 身の回りにある「未解決の課題」について、以前よりも気がつくようになった。 (n=151)	70.2%	29.8%
Q4 (主体性) 何かの問題を自分の手で解決したり、明らかにしたいと、以前よりも思うようになった。 (n=151)	76.2%	23.8%
Q5 (創造性) 何かの問題を解決したり、明らかにするための新たな方法について、以前よりも考えるようになった。 (n=151)	76.8%	23.2%
Q6 (協同性) 何かの問題を解決したり、明らかにするために他者と協力することの重要性を、以前よりも感じるようになった。 (n=151)	86.1%	13.9%

Q5（創造性）：何かの問題を解決したり、明らかにするための新たな方法について、以前よりも考えるようになった。

Q6（協同性）：何かの問題を解決したり、明らかにするために他者と協力することの重要性を、以前よりも感じるようになった。

「学習内容の振り返り」Q1～Q6および「学習成果の振り返り」Q1～Q6について「そう思う、まあそう思う、あまりそうは思わない、そうは思わない」の4件法による回答を求めた。また、『あなたは、「プロジェクト・ワーク」を通じて、何を得たと思いますか？そしてあなたは、それを、この先の人生でどう活かせると思いますか。自由に記述して下さい。』という自由記述の項目も設けた。

表2に生徒アンケートの結果を示す。4件の回答を「そう思う」「まあそう思う」を肯定的回答、「あまりそう思わない」「そう思わない」を否定的回答としてまとめている。アンケート結果について特徴的な点に絞って評価する。

まず「学習内容の振り返り」について、探求的学びの項目（何かについてより深く考え、答えを探し求めることができた）について特に肯定的回答が多かった。同じように「学習成果の振り返り」では学び方・考え方（何かを学んだり、考えたりする方法を、新たに身に付けることができた。）について9割を超える生徒が肯定的回答であった。この結果から各活動（テーマ）がプロジェクトワークで目標の一つとした課題解決の方法つまり探求的学びについて知る機会となったといえよう。それら課題解決活動が主体的であったという回答も8割に達していることから、生徒達は活動に積極的に参加したといえるだろう。

一方でプロジェクトワークの第一目標とした「多様な視点の獲得および課題発見力の向上」については設問項目「学習成果の振り返り」のQ3（身の回りにある「未解決の課題」について、以前よりも気がつくようになった。）の肯定的回答が7割程度にとどまっている。プロジェクトワークは教員の設定したテーマに沿って課題解決を進める活動であるため、課題発見について生徒の意識を[△]発展させるプロセスが明確でなかったことがこの結果となって現れているものと考えられる。第一の目標が達成できなかった点については十分に反省し、今後改善すべき課題である。

プロジェクトワークの目標のうち「課題解決に協同して臨む態度の育成」については設問項目「学習成果の振り返り」のQ6（何かの問題を解決したり、明らかにするために他者と協力することの重要性を、以前よりも感じるようになった。）の肯定的回答が86.1%であることから、この点については目標は達成されたと判断できる。今回のテーマの中には、主に個人での課題解決活動が中心であったものもあるため、その分を考慮すると十分に満足できる結果といえるだろう。

5. おわりに

プロジェクトワークは平成23年度初めて実施した内容である。このため担当者も試行錯誤を繰り返しながら授業を組み立てることとなった。学校に総合的学習の時間を専門に行う教員はいないわけであるから、担当させられた教員に授業計画やその実施などの運営がすべて任せられることになるとかなりの負担になる。担当となった教員が外れくじを引いた思いで授業をやれば、当然生徒にとってもまた教員自身もおもしろくない時間となってしまうであろう。これが総合的学習の時間が定着しない原因の一つでもある。今回のプロジェクトワークは総合的学習の時間の持つそのようなマイナス面をできるだけ少なくするため、担当者の得意なことややってみたいことをテーマとして設定し、担当者自身も楽しみながら活動が行えるよう配慮した。授業者がそのテーマについて考えること課題解決を進めることを楽しみ、生徒達に[△]対価のともなわない学びの楽しさを伝えることも目指した。この点についての評価は材料が少なく、ここで報告することができなかったが、アンケート調査での自由記述部分などから生徒の考えを分析してみたいと考えている。プロジェクトワークを通して卒業研究の課題設定および課題解決の過程における生徒の戸惑いが少しでも低減されるのではないかと期待している。

H23 年度 2 年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名:1. 埼玉県にゆかりのある人物について伝記を作る

○具体的な活動内容(概略)

4月中旬～5月上旬:埼玉県出身にゆかりのある人物の選定(一部埼玉県の枠を超えた生徒もいた。) / 5月上旬～7月上旬:選定した人物の業績や生き様について学習を行った。(歴史的事実の確認) / 6月中旬:埼玉県平和資料館を利用して、資料館の活用方法を学び、資料館学芸員の授業を体験した。 / 7月下旬～8月上旬:選定した人物のゆかりの地を訪問し、インタビューを通じて事実確認や資料館や記念館などの利用した。 / 8月中旬:ゆかりの地の訪問報告の発表会を実施した。 / 9月～:これまでに収集した事実関係をもとにし、それを題材にした伝記を創作した。 / 10月中旬:埼玉県歴史と民俗の博物館で伝記創作のための方法や創作活動についてのヒントを学芸員の先生の授業から学んだ。 / 11月下旬:それぞれの創作物の冊子製作と綴じ込みを行い、さらに発表報告会を行った。

○生徒の自己評価集計Ⅰ(回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	13	15	14	13	16	14
否定	3	1	2	3	0	2

○生徒の自己評価集計Ⅱ(回答数)

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	16	8	8	14	11	12
否定%	0	8	8	2	5	4

○実践内容の課題と提言

個人の活動と全体活動のバランスとスピードを整えることが大切である。

各活動には生徒個人の意欲にばらつきがあり、夏休みのゆかりの地の訪問活動に至っては、生徒自身の活動がすべてである。但し、報告発表会では、それぞれ現場を踏んでいるという自信から発表内容も充実し、発表態度も好ましい状況であった。

博物館の利用は意義深い。他の先生や学芸員の方の授業などは生徒自身も興味深く聞き入っていた。

創作活動は私にとっても専門外であり、あまり指導的なことはできなかったが、生徒は楽しみながら活動していた。

H23 年度 2 年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名:2. 社会貢献活動に参加する

○具体的な活動内容(概略)

- ・NPOやボランティアについて学ぶ。
- ・募金活動や、NPO活動の現場を体験する。
- ・身近な社会の問題に対し、自らその解決法を考え活動する。

○生徒の自己評価集計Ⅰ(回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	20	21	18	17	19	18
否定	1	1	4	5	3	4

○生徒の自己評価集計Ⅱ(回答数)

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定	22	16	19	15	17	22
否定	0	6	3	7	5	0

○実践内容の課題と提言

本テーマは(財)日本財団の全面的な協力の下に授業を行った。授業を進めるのもできるだけ日本財団の職員の方々にお願いし、実際の現場の感覚をできるだけ生徒に伝え、リアル感を持ってプロジェクトに関われるよう配慮した。1学期は実際に街頭募金を行ったり社会福祉施設を訪問したりするなど、社会貢献活動について体験を通して理解を深められるようなプログラムを行った。1学期の後半から6つの班を編制し、自分たちで具体的な社会貢献活動を立ち上げる活動をはじめた。夏休みには合宿を行って自分たちのプランを進める準備も行った。この活動は予想以上に生徒にとって難しいものであったようである。自分たちでも取り組めるだろうと思って設定したテーマであっても多くの壁があり、思うように活動を進めることができず、活動に対する意欲も低下していった。そのような中、個人や活動班ごとの面接、プロジェクトに対する助言などを積極的に行った。グループによっては学校外のグループやNPOとも連絡を取り、具体的な活動に発展していった。

生徒の自己評価Ⅱの「学び方・考え方を学ぶ」および「課題解決への協働指向を高める」に対して全員が肯定的回答をしているのは、プロジェクトワークの目標に対して本活動が有効に機能したことを示しているといえる。一方「課題解決意欲を高める」という点では解決にあたって困難が生じた場合すぐにあきらめるという本校生徒の傾向の一端が現れているといえるかもしれない。

H23 年度 2 年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名:3. 確率・組み合わせ論について考える

○具体的な活動内容(概略)

ブルーボックス「離散数学『数え上げ理論』」をもとに授業を展開した。授業では時間をかけて、公式や定理を自分で導き出すことを目標とし、公式や数式の意味を理解することを期待した。4人ずつ6グループを作り、4人で問題を考える形態ですすめた。行った内容は、①並び方を考える②選び方を考える③道順を数える④分割の仕方を数える⑤RiSuPia 見学である。

○生徒の自己評価集計 I

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定%	8	22	15	14	15	15
否定%	16	2	9	10	9	9

○生徒の自己評価集計 II

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	20	7	13	15	15	18
否定%	4	17	11	9	9	6

○実践内容の課題と提言

- 本をベースにし、12回でどれくらいのことができるか、計画をたてるのが難しかった。
- 内容が数学なので、「横断的学習の実現」や「在り方・生き方を考える」に対する肯定者が少なかったことは、その通りだと思った。「探求的学習」や「学び方・考え方を学ぶ」については肯定者が多かったため、安心した。探求的学習から横断的学習に結びつけていくよう、導くことを今後できればよいと思う。
- 授業にほとんど参加していない生徒もみられたので、興味をもたせることができなかったのだと思う。「数学は苦手だからわからない」と感じている生徒の意識を変えることができなかった。
- 考えた結果を発表させる形態を作ることが、うまくできなかった。
- 授業時間以外の課題を出すことが難しく、実際ほとんどできなかった。
- いろいろ反省点はあるが、普段の数学の授業ではできないことや、考える時間をとることができたことは有意義であった。また、生徒の感想に「数学以外の問題についても、この授業で学んだ考え方をういて、あきらめずに考えていきたい」とあったのでよかった。

H23年度 2年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名：4. 映画を見て考える

○具体的な活動内容(概略)

いくつかの映画を鑑賞し、それらの映画についての感想を述べ振り返る活動を行った。

○生徒の自己評価集計Ⅰ(回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	14	18	17	14	13	12
否定	7	3	4	7	8	9

○生徒の自己評価集計Ⅱ(回答数)

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定	20	15	13	14	14	13
否定	1	6	8	7	7	8

○実践内容の課題と提言

映画を観るという行為が娯楽として単に楽しいというだけではなく、その背景や考え方をすることで映画の見方が深まるだろうと期待してこの活動を行った。この活動では、生徒が知っているだろうと思われる知識と映画の内容を考えながら映画を選択したが、予想以上に生徒の知識量や社会に対する興味・関心が低く、生徒に合わせた映画を選択することが難しかった。ただし、生徒の反応を見ると、なにか物事を考えるきっかけとなったと思われる発言もあったため、それなりの効果はあったと考えられる。

H23年度 2年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名:5. エコカーや風力発電の将来・藻から石油・子どもの未来に提言

○具体的な活動内容(概略)

・エコカーや風力発電などの省エネルギー技術の将来を、根拠を示して予想する活動を行った。
 ・藻から石油を作る技術として、筑波大学の渡邊信教授が発見した効率よく石油を作る藻や、より研究の進んでいる企業が保有する藻などに着目し、原発の代替エネルギーとしての利用を考える活動を行った。

○生徒の自己評価集計Ⅰ(回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	6	6	5	5	6	6
否定	1	1	2	2	1	1

○生徒の自己評価集計Ⅱ(回答数)

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定	6	6	5	7	7	7
否定	1	1	2	0	0	0

○実践内容の課題と提言

・エコカーと呼ばれる様々な省エネルギー車の未来や、洋上風力発電が日本には適していることを調べ上げることで、数年後に主流となる技術の将来を根拠を示して予想した。この活動を通して、原発の代替エネルギーとしての可能性までも視野に入れた学習となった。

・はじめは、「藻から実際に石油を作ってみよう」ということで、学校での生産を考え、筑波大学の渡邊信教授にメールを出したが、テレビでも紹介されるように忙しいことからか、返信がなかった。

したがって、調べ学習になってしまったが、神戸大学ベンチャー企業が保有を明らかにした榎本藻などの他の新技術などの将来性なども検討に加えるほど主体的に学習活動が行われ、原発の代替エネルギーとしての火力発電に応用することで、脱炭素社会にも貢献できることを提言する内容に発展した学習となった。

H23 年度 2 年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名：6. アジア隣人プログラム

○具体的な活動内容(概略)

- ・インドネシアの高校生と両国のゴミ問題について解決策を考え実践する。
- ・インドネシアの高校生を受け入れるための準備・語学学習
- ・スカイプによる交流

○生徒の自己評価集計Ⅰ(回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	19	16	12	13	16	13
否定	1	3	8	7	4	6

○生徒の自己評価集計Ⅱ(回答数)

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定	18	17	18	19	18	19
否定	2	3	2	1	2	1

○実践内容の課題と提言

本プロジェクトは、H22年 10 月からトヨタ財団のアジア隣人プログラムの助成をうけ、インドネシアと日本の高校生が両国のゴミ問題を考え、解決するための方法を探求し、実践していくというプロジェクト参加者 20 名で行ったものである。プロジェクトを実践するに当たって、なるべく高校生自身に身近なゴミ問題について主体的に考え実践して欲しいと願い、生徒リーダーを中心に活動を行ってもらったが、1)日本国内だけではなくインドネシアの高校と連携を取りながらの活動であったところ、2)生徒自身が自分で課題を発見して行動することに、まだまだなれていなかったところ、3)教員側も、今の生徒の実情にあった指導が不足していたことなどから、活動目標の把握や主体的課題発見の項目の否定的回答が高かった。教員側が、活動内容を提示すると、それにこだわってしまって、その枠から出られないことを危惧し、極力、教員は口出しをしないようにしたが、それが、生徒の混乱や活動目標の把握の難しさにつながったといえる。活動目標も、生徒自身に考えて欲しかったのだが、指導方法も現在の生徒の様子にあった方法を考えていかなければならない。

ただ、幸いにも、このプロジェクトをきっかけに国際的視野にたった卒業研究の応募者が倍増し、インドネシア語検定にも 2 名(E 級)合格、またインドネシアへの留学を希望する生徒が 2 名現れるなど、一定の成果を上げることができた。

H23年度 2年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名：7. 小さな平和構築について考える

○具体的な活動内容(概略)

- ・平和を「暴力の不在状態」とする定義*に基づき、映画・音楽・資料館・美術館・インターネットの資料を利用して、戦争・紛争・差別・貧困といった広義の「暴力」について触れる。
- ・各資料に見られる「暴力」の内容について整理し、その多様性について考える。
- ・上記定義に立った時、日本社会が「平和」であると言えるかどうか、根拠を示して論述する。
- ・非平和状態の「改善」のため、できる「小さなこと」は何か、考える。

*行為者の明らかな「直接暴力」に加え、行為者の特定が困難である「構造的暴力」、そしてそれらを正当化する「文化暴力」の3種をその視野に含んでいる。直接暴力の不在状態を「消極的平和」、構造暴力の不在状態を「積極的平和」とし、両方の実現こそが平和構築の目標であるとする。

○生徒の自己評価集計 (回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	20	21	22	15	15	15
否定	2	1	0	7	7	7

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定	22	21	15	14	16	21
否定	0	1	7	8	6	1

○実践内容の課題と提言

- ・課題発見力について不十分な成果となった点が、改善すべき最大の課題である。平和に関する諸課題を、遠い世界(あちら)に発見させることで終わったならば、平和教育はかえって有害にすら成りうる。生徒の日常(こちら)の中に課題を見つける姿勢を育むことが不可欠である。
- ・学習の主体性について課題が残った。これは、常に与えられた資料に対して活動が展開されたことによるものと思われる。個々の日常に目を向けさせ、そこに「実は」存在する暴力について考えさせる活動を充実させるべきであった。それにより、課題発見力についても改善が期待できるだろう。
- ・平和構築の「実現の困難さ」が認識される一方、その解決への意欲や創造性について消極性を助長する結果となった危険性がある。平和構築の「成功」事例に触れる等の試みが必要であろう。

H23年度 2年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名:8. αプロジェクト

○具体的な活動内容(概略)

『身近な環境の改善』をテーマに、被災地への支援と校内環境改善に取り組んだ。被災地支援では、節電対策への支援として、朝顔グリーンカーテンを送る取り組みをおこなった。情報収集にはじまり、資金調達のための募金活動や、設置方法と資材調達、また、現地とのコンタクトなどを生徒自らが行き、一応の達成を得た。校内環境改善では、改善すべき問題点の発見からその解決までを行った。『学校通用門周辺の除草清掃作業』、『青春を語り合うベンチの設置』、『とにかくガラスをきれいにしたい』の3つのグループに分かれて取り組み、それぞれが当初の目標を達成することができた。

○生徒の自己評価集計Ⅰ(回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	19	19	17	18	18	15
否定	0	0	2	1	0	4

○生徒の自己評価集計Ⅱ(回答数)

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定	17	13	15	17	18	18
否定	2	6	4	2	1	1

○実践内容の課題と提言

『主体的学習』、『在り方生き方を考える』、『課題発見力を高める』の3つの項目で否定的な回答が多くあった。これは、被災地と係わるにあたって、先方の都合に配慮する必要から、教員がイニシアチブをとる機会が多くあった点に由来すると思われる。このことは、予め生徒達にも伝えてあった点であるが、「君達の主体的な取り組みとして責任感をもって進めてほしい」という方向性との矛盾は否めない。想定された事とは言え、もう少し細やかな指導ができれば、改善の余地があったと思われる。

モノや情報が過剰に行き交う中であって、自らが、今必要とするものを探し、精査し、使うという機会を、バーチャルではなくリアルに経験して欲しいと思い、このプロジェクトを立案した。肯定的な回答が多かったことを好意的に受け止めれば、一応の成果は得られたのかもしれない。

大人が成長や成功を求めるあまり、必要以上に失敗を恐れる傾向が強いことを、最近の生徒達に感じている。しかし、潜在的・本能的には、生徒達も自分を試す機会を求めていることも実感できる。総合学科のカリキュラムが担保できる可能性に期待し続けたい。